

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24790503

研究課題名(和文) 讃岐の丘発信：地域医療実習プログラム改善プロジェクト

研究課題名(英文) The project to improve the program of Community health practice in Kagawa University

研究代表者

泉川 美晴 (Izumikawa, Miharu)

香川大学・医学部附属病院・助教

研究者番号：60624088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：昨今、各大学で地域医療臨床実習が取り入れられる目的として、若手医師の地方定着による医師偏在の是正などが挙げられる。香川大学で必修化された地域医療臨床実習において、どのような実習内容により地域医療人としての基本的能力を身につけることができるか、また地域医療に従事する動機づけがなされるかを調査した。実習時のWebアンケートの結果から、「コメディカルスタッフとのコミュニケーション」や「チーム医療」の項目に対する自己評価が高い学生は実習後に有意に地域医療に関する関心が高まっていた。さらに、卒業時にどのような進路を希望しているかを調査することで、必修化された地域医療実習の意義について考察した。

研究成果の概要(英文)：Recently, the purpose that the community health clinical practice is taken at each university includes the promotion of the doctor involved in the community health of the doctor uneven distribution by the provinces established of the young man doctor that a correction. In the community health clinical practice made to require in Kagawa University, whether the motivation was able to be acquired a basic ability as the community health person by the content of what practice, and to be engaged in the community health was performed was investigated. After it had practiced, it was interested in the student with a high self-evaluation to the item of result of the Web questionnaire when practicing or "Communications with co-medical staff" and "Team medical treatment". In addition, the meaning of the community health practice made to require was considered by investigating what course to be hoped when the student who experienced the practice by the fifth grader graduated.

研究分野：地域医療

キーワード：地域医療 卒前教育 進路 コアカリキュラム

1. 研究開始当初の背景

香川大学の地域医療臨床実習の必修化の経緯

医師の偏在などにより、地域医療の崩壊が危惧されるなか、厚生労働省は地域医療再生計画を推進しており、その一環で配分された基金を原資とする香川県からの寄付により平成22年7月に地域医療教育支援センター(図2)が附属病院内に設置された。一方、文部科学省は地域医療を医学教育モデルコアカリキュラムに盛り込み地域医療実習を必修化している²⁾。これらを受けて、本学では、地域医療教育支援センターが担当となり、平成23年度4月より医学部5年生の地域医療臨床実習が導入・実施されることになった。

香川県の地域医療問題

全国で社会問題となっている医師の偏在、診療科の偏在は香川県においても顕在する。県全体の人口10万人当たりの医師数(平成18年末)は238.7人であり、全国平均(206.3人)と比較すると約16%プラスの水準である。本県の医療圏は、県東部の大川医療圏、小豆島の小豆医療圏、高松市を中心とする高松医療圏、県中部の中讃医療圏、県西部の三豊医療圏の5医療圏から構成されている。それぞれ医療圏別医師数は、大川医療圏が155.2人(約25%マイナス)、小豆医療圏157.1人(約25%マイナス)、高松医療圏が286.6人(約40%プラス)、中讃医療圏が223.7人(約15%プラス)、三豊医療圏が187.7人(約10%マイナス)となっており³⁾、医師が偏在している(図1)。特に小豆医療圏は、離島であるため、他の地域から医療従事者が通勤することが困難であり、かつ圏内での若年人口そのもの減少も進んでおり、他の医療圏と連携した抜本的な医療従事者の確保政策が急務となっている。

2次保健医療圏域図

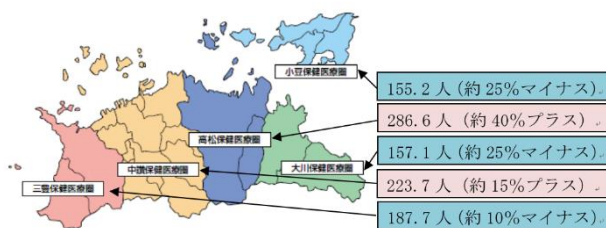


図1

香川大学医学部附属病院地域医療教育支援センターについて

香川県の地域医療再生計画の一環として設置された、地域医療教育支援センター(以下センター)は、**地方自治体、地域医療関係機関と連携し、医療人の地域における偏在を是正する**とともに、地域医療人の生涯にわたる医療技術の維持と向上を支援するため、入学から卒前・卒業・専門職習得の流れの中で、

地域医療を担う医療人の教育・研修などを目的とする機関である。

センターは大学内センター長1名、専任医師1名、**学外の地域医療機関の幹部医師が兼任する7名の副センター長、学内外の支援教員数名**から構成される。

2. 研究の目的

地域医療臨床実習に効果的なプログラムについて⁴⁾の報告や、地域医療臨床実習が進路に与える影響⁵⁾についてはこれまでも述べられてきている。しかし、実習の必修化前後で、卒業生の進路選択の推移を比較した調査や、より効果的なプログラムを導入が医師の偏在を是正する可能性があるかについては、まだ報告されていない。特に、必修化実習では、地域医療に対する関心の程度に関係なく、全学生に地域医療の魅力伝えつつ地域医療に貢献する能力を向上させる必要があるという点で、選択実習よりプログラムの作成が難しい。

そこで、今回我々は、2つの調査を行う。第一に、地域医療に貢献する能力の向上を目指すためには、どのようなプログラムが効果的かを探索するために、実習を受けた全学生の自己評価と学生に対する指導教員の評価をWebを利用してアンケートを行う。第二に、必修の地域医療臨床実習の導入により、卒業の進路決定において、地域選択や診療科選択にどのような影響があるかを、高学年(4年~6年)の各学年終了時に、3年間にわたり経年的にアンケート調査を行う。

この調査により、卒前の必修化地域医療実習が進路選択にどのように影響を及ぼすかを知ることは、地域医療を支える医療人を育成する魅力的な卒前教育のプログラムの作成の糸口の獲得となり、医師偏在の是正に貢献できる可能性があると考えられる。

【参考文献】

- 1) 高屋敷明由美, 岡山雅信, 他: プライマリ・ケアに関する卒前カリキュラムの現状. 医学教育 2003; 34: 215-222.
- 2) モデル・コア・カリキュラムの改定に関する連絡調査委員会 議事録: 2007; 12月
- 3) 厚生労働省「平成18年医師・歯科医師・薬剤師調査」
- 4) 岡山雅信, 梶井英治: 地域医療臨床実習の感想や全般評価と関連のあった実習項目. 医学教育 2008; 39: 227-244
- 5) 高木 麻里子: 地域医療実習が医学生の進路選択に与える影響. 医学教育 2008; 39: 98

3. 研究の方法

平成24年度、平成25年度に5年生を対象に必修である地域医療実習を施行した。実習中はWebアンケートシステムを用いて、リアルタイムに自己評価を行った。

協力機関

綾川町国民健康保険陶病院、小豆島町内海病院、坂出市立病院、さぬき市民病院、三豊総合病院、土庄中央病院、香川県済生会病院 綾上診療所、香川県立白鳥病院

地域医療臨床実習について

対象：当大学医学部 5 年生

実習期間：1 週間

実習場所：県内の地域医療機関

実習内容：介護老健施設、巡回診療、訪問診療、リハビリテーション、予防事業、済生丸巡回検診、チーム医療、外来、救急など体験型実習を行う。

2～3名のグループが4コースある実習コースの内、定められた1コースを受ける。各施設毎に、副センター長、もしくは支援教員が中心となって学生の指導に当たる。

Web アンケートによる実習の評価について：地域医療教育支援ネットワークを構築した(図2)。

図2



実習期間中の学生に1台ずつノートPCを貸出する。学生は、毎日実習先で日々の自己評価を行い、かつ指導教官による評価を受ける。学生、指導教官はそれぞれのパスワードを持ち、互いの評価は閲覧・干渉できないシステムとなっている。アンケートはそれぞれ13項目の質問からなり、4段階で評価する。毎日のアンケートをWebを通して、病院内のセンターへ提出する。

センター運営委員会ならびに次年度実習プログラムの再構成

この地域医療臨床実習が適切なものであるかを評価し、より効果的な実習を提供するために、次年度のプログラム再構成へ向けてセンター教員、各関連施設の副センター長をはじめとする指導教官、諮問者が集まり、センター運営委員会を1～2回/年実施する。ここで、現場の医師の評価や感想、また大学側の指導医の評価、上記のWebアンケートにて得られたデータをもとに、次年度の実習プログラムを検討する。特にWebアンケートにお

いては、『この実習によって地域医療に貢献する能力が向上した』という自己評価に寄与する因子を抽出し、その項目における自己評価が高くなるようなプログラムを検討する。ただし、より良いプログラムの候補があったとしても、各施設の状況やマンパワーの問題により変更困難な場合には前年度の実習プログラムを継続する。

進路調査アンケート

平成25年度地域医療実習対象の学生が、卒業時の進路決定に影響する項目を調査する。属性、選択(希望)診療科、研修先(希望)地域、地域医療実習(選択もしくは必修)の経験、進路決定に影響した(する)項目などについて調査する。

4. 研究成果

平成24年度のWebアンケート回答者数は90名(回収率98.9%)。1週間を通して、「プライマリケアの体験」、「在宅医療」、「チーム医療」、「疾病予防・健康維持増進についての体験」に対する自己評価は高く、「地域の救急医療の体験」に対する自己評価はやや低かった。また、「地域医療に貢献する能力が向上した」については、「その通り」が77.5%、「どちらかといえばそう」が20.22%、「どちらかといえば違う」、「全く違う」がそれぞれ1.12%であった(図3)。有意に寄与率が高かったのは、「コメディカルとのコミュニケーション： $\rho=0.409$ 」、「チーム医療の体験： $\rho=0.273$ 」の自己評価であった。

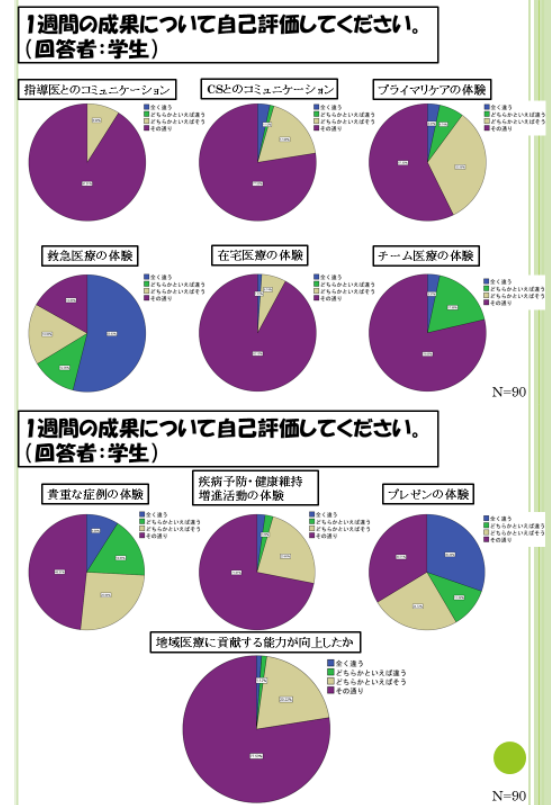
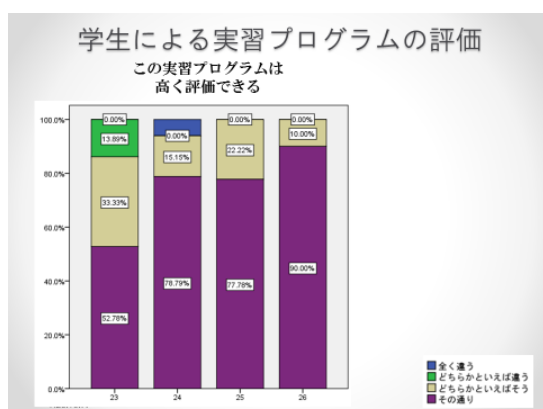


図3

H24.10.2、H25.3.12 に協力機関の担当者が集まり運営委員会を実施し、プログラムの改良すべき点について意見交換し、H25 年度のプログラムを改良した。具体的な改良点は、同施設での実習期間を 1 日間から 2 日間に延長したこと、コメディカルスタッフの積極的な参加を促し、チーム医療の体験機会を充実させること、救急医療の現状を指導すること、などである。その結果、H25 年度の Web 回答者数 99 名(回収率 100%)の自己評価は、「地域の救急医療の体験」や「貴重な症例の体験」に関して、H24 年度の学生と比較して有意に高くなった。実習プログラムに対する評価も年々高くなった(図 4)。



また、「地域医療に貢献する能力が向上した」の自己評価に寄与率が高かったのは、「チーム医療の体験」の自己評価であった。また、地域医療に対する関心は、実習前後で有意に上昇し、関心が高まった学生はそれ以外の学生と比べて、実習での自己評価「コメディカルスタッフとのコミュニケーション」や「チーム医療」が有意に高かった。卒業時アンケートの対象者は平成 25 年度の実習生で、回答率は 100%であった。現在解析中であり、論文執筆予定である。

【参考文献】

- 1)高屋敷明由美, 岡山雅信, 他:プライマリ・ケアに関する卒前カリキュラムの現状.医学教育 2003 ; 34 : 215-222.
- 2) モデル・コア・カリキュラムの改定に関する連絡調査委員会 議事録:2007;12月
- 3) 厚生労働省「平成 18 年医師・歯科医師・薬剤師調査」
- 4) 岡山雅信, 梶井英治:地域医療臨床実習の感想や全般評価と関連のあった実習項目. 医学教育 2008 ; 39 : 227-244
- 5) 高木 麻里子:地域医療実習が医学生の進路選択に与える影響. 医学教育 2008 ; 39 : 98

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 4 件)

1) 『地域医療実習コアカリキュラム達成度について: Web アンケートシステムを用いた検討』

泉川 美晴、大森浩二、大原昌樹、久保文芳、田岡輝久、十枝めぐみ、中尾克之、南木伸基、三宅賢一、若林久男

2013 年 07 月 26 日～2013 年 07 月 27 日
第 45 回 日本医学教育学会大会

千葉大学亥鼻キャンパス 千葉大学医学部、薬学部、看護学部(千葉県千葉市)

2) 『実習の前後での地域医療への関心の変化について』

泉川 美晴、大森浩二、大原昌樹、久保文芳、田岡輝久、十枝めぐみ、中尾克之、南木伸基、三宅賢一、若林久男

2013 年 05 月 19 日 第 4 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会

仙台国際センター (宮城県仙台市)

3) 『地域医療実習における目標到達度の自己評価とそれに寄与する因子について: Web アンケートシステムを用いた検討』

泉川 美晴、大森浩二、大原昌樹、久保文芳、田岡輝久、十枝めぐみ、中尾克之、南木伸基、三宅賢一、若林久男

2013 年 05 月 19 日 第 4 回日本プライマリケア連合学会学術大会

仙台国際センター (宮城県仙台市)

4) 『地域医療実習における目標到達度の自己評価とそれに寄与する因子について-Web アンケートシステムを用いた検討』

泉川 美晴、大森浩二、大原昌樹、久保文芳、田岡輝久、十枝めぐみ、中尾克之、南木伸基、三宅賢一、若林久男

2012 年 11 月 17 日 日本プライマリケア連合学会四国ブロック支部

新居浜市医師会館 3 階 大会議室

[その他]

ホームページ等

平成 23 年度地域医療実習のアンケート結果
<http://www.med.kagawa-u.ac.jp/faculty/center/shisetsu/chiikiiryuu/23/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

泉川 美晴 (IZUMIKAWA, Miharuru)

香川大学医学部附属病院
地域医療教育支援センター
特命助教
研究者番号：60624088